

ものであって木の付属物ではない。木全体ではないが、その部分を担ってぶどうの木として生きるのである。それぞれの枝の働きに応じて、木全体の成長も影響を受ける。

このような信徒のあり方を、レオナルド・ドゥーハンは次のように述べている。「信徒は教会に属するのではないし、教会のなかで、ある役割を持つものでもありません。むしろ、洗礼によって彼らが教会そのものになり、彼らの使命とは教会の使命そのものなのです」(信徒を中心とした教会 P47)。

3) 信徒の役割

信徒の使命は教会の使命そのものであるということから、教会における信徒の役割も明確になってくるだろう。

「教会のこの使命を遂行する信徒は、教会においても世間においても、霊的な秩序においても現世的な秩序においても、その使徒職を果たすのである。この二つの秩序は、一応区別されているが、神の計画の中では一つに結びついている。すなわち神は、全世界をキリストにおいて新しい被造物としてふたたび自分に結び合わせる計画であり、それはこの地上で始まり、終わりの日に完成する。信者であり同時に市民である信徒は、絶えず同一のキリスト教的良心をもって、この二つの秩序に対処しなければならない」(信徒使徒職教令 5)。

信徒がその役割を果たす場は、おのずから教会が関わる場すべてに広がるのである。それは同時に、信徒が関わる場すべてが教会が関わる場である、ということにもなるだろう。信徒は、教会にもそしてまた社会のあらゆる場にも、あくまでもキリスト信者として関わり働くのである。

しかしその一方で、信徒固有の場というものもある。それは、キリスト信者の共同体を超えて、その外に広がる広大な領域である。そこは、基本的に信徒が奉仕者として関わりなければ、キリストの救いの業が見えにくくなる場であるからこそ、そこでの教会の働きはもっぱら信徒にゆだねられるのである。

「信徒に固有の召命は、現世的な働きに従事し、それらを神に従って秩序づけながら神の国を追求することである。信徒は世俗の中に生きている。すなわち、世間のそれぞれのあらゆる務めと仕事に携わり、家庭と社会の一般的生活条件の中で生活するのであって、かれらの生活はいわばそれらによって織りなされている。かれらはそこに神から招かれたのであり、自分の務めを果たしながら、福音の精神に導かれて、世の聖化のために、あたかもパン種のように内部から働きかけ、こうして信仰・希望・愛の輝きをもって、特に自分の生活のあかしを通して、キリストを他の人々に現わすよう召されている」(教会憲章 31)。

さらに、「信徒によらなければ教会が地の塩となることができない場所と環境において、教会を存在させ活動的なものとするのが、特に信徒に与えられた使命である」(教会憲章 33)。

この世に存在する教会は、キリストが日々苦しむ人とともに苦しみ、喜ぶ人とともに喜ばれたように、何よりもまず第一に、信徒が、喜びや苦しみのうちに生き、働くことによって、この世と具体的、現実的に強く結びついている。信徒の奉仕は、このキリストの生き方に直接的に結び付けられ、希望のうちにキリストの約束の実現に参与する。それは、「キリスト信者はこの世界が、創造主の愛によって造られ保たれ、罪のどれいの状態に陥ったが、キリストの十字架の死と復活とによって、『悪しき者』の権力が破壊され、解放された世界であり、こうして神の計画に従って改善され、ついには完成に達する世界であると信